

「虹はみえますか」

埼玉県 渡辺耕太郎

あのとき、虹は見えなかった。

もう、思い出したくない。忘れたい思い出。

保育園の年長組のときのこと。私はそのころ入院していた。先天性の緑内障による弱視のためだ。

ある日のことだ。窓際に立っていた母ちゃんが私を呼んだ。私が駆けていくと母ちゃんは私を抱き上げ言った。「虹が見えるよ」

見えなかった。虹なんかどこにも。

いくら探しても、見つからなかった。

言おうとした。「虹なんか見えないよ」

でも、言ってしまった。「見えた」

結局、虹なんか見えていなかった。探すのがイヤになった。母ちゃんを心配させちゃいけないと思った。怖くなった。置き去りにされた気分だった。

だから、ずっと見ていた。灰色の窓のサッシを。

私の視力は、両目ともに0.04。それはこのときから変わっていません。

母ちゃんは、障害を持つ子供など、もちろん初めてで、将来に対する不安はぬぐえなかったそうです。

私が中学生の時のことです。塾で新しい先生に代わって初めての授業のとき、先生が私の望遠鏡を取り上げました。

「馬鹿野郎！ オモチャなんか使うんじゃない！」先生はそう怒鳴りました。私にとって望遠鏡は目の一部です。私はただただ啞然としてなにも言えなくなってしまいました。

「先生、その子、目が悪いの」

私が何も言えないでいると、小学生のときから一緒のクラスの子がそう言ってくれたのです。私は嬉しかった。そして、みんなが私のことについて私が思っていたよりもずっとよく知っていてくれたということに感動したのです。

私は自分が弱視であることを積極的に話すことにしました。今までは弱視であることで差別され、蔑まれることが怖くて隠していたのです。実際に今までたくさん嫌な事があつたからです。しかし、私のような障害を持つ人間がいるということを知ってもらうためにはそれが一番良い方法だと考えたからです。

部活動の先輩後輩、クラスのみんな、そして弁論大会。まずは身近なところから。少しずつですが確実に。話していくとみんなとても良くわかってくれます。

自分の心は閉じていた。自分の目のように。

あのとき、虹は見えなかった。

でも、これからはたくさんの虹が見える。お互いの心に架かる大きな虹が。

そして母ちゃんに言いたい。

「虹が、虹が見えるよ」